

わかりやすい仏教講座

お盆・お彼岸・中陰とは・・・

講師 山田和義 (株式会社山田念珠堂 社長)

創業文久元年
仏壇・仏具・念珠製造卸
サロン あさん堂

極楽

須弥山

彼岸界 仏の世界

欲や煩惱から解放された悟りの世界

- ・天界
- ・人間界
- ・修羅界

六道界

地下350Km

閻魔王

- ・畜生界
- ・餓鬼界
- ・地獄界

- ① 浅瀬
- ② 有橋
- ③ 深瀬

三途の川
川巾280Km

中陰界

現世と来世の中間の世界
四十九日間の裁判の期間

- 初七日
- 二日七日
- 三日七日
- 四日七日
- 五日七日
- 六日七日
- 七日七日

◎往生する時(亡くなった時)
◎往來する時(彼岸・盆・等の仏教儀式の時)
必ず中陰界を通らなくてはならない



- ・暗いので灯をつける
- ・悪霊界なので香で清める

初七日 秦広王

本地は不動明王
秦広王によって生前の善・悪の有無、及び人の業の資質などの審査を受けます。

二七日 初江王

本地は釈迦如来
初江王の担当の時。先ず葬頭河の婆さまらによって生前の悪事や、どうにもならなかった自分の悪業などがついた衣服を脱がされ、三途の河を初江王(お釈迦様)に見守られながら渡る事ができる。(但し、極悪人は別)

三七日 宋帝王

本地は文殊師利菩薩
宋帝王が邪淫の気持ちを持つ邪鬼を取り除き悪獣から守って下さる。

四七日 五官王

本地は普賢菩薩
五官王が嘘をついたりした諸々の罪の重さを調べ、それを取り除いて下さる。

五七日 閻魔王

本地は地蔵菩薩
閻魔王が浄玻璃の鏡に、生前の悪事が総て写し出される事柄を見て、極悪人には厳しく善い人には優しく裁いて下さる。

六七日 變生王

本地は弥勒菩薩
變生王が四七日の罪の重さを計った秤と五七日に生前の悪事を映した浄玻璃の鏡を再度チェックして、もう悪い事が残っていないかを確かめてくれる。

七七日 泰山王

本地は薬師如来
泰山王が、それぞれ生前における善悪を考慮して、次の生まれ変わり先を仮に決めてくれる。更に薬師如来の神通力をもってどのような難病の人でも完治させてくれる。あるいは怪我で手足を失った人でも、元通りの身体にしてくれるのです。ここで中陰・満中陰の行事は終わりです。

※ 本地とは本来境地・仏・菩薩の本体を指します。

此岸界

我々の住んでいる
煩惱の世界



■ 中陰の思想とは

中陰とは、人が亡くなって次に生まれ変わることが仮に定まる四十九日までのことを指します。

今から約千年位前に中国で考えだされたと伝えられる十王経の経典によりますと、十人の王様がいて人が亡くなった日から四十九日を七日ごとに分けて、それぞれ担当する七人の王様と百ヶ日・一周忌・三回忌までの役目をする三人と合わせ計十人の王様が三回忌までの法則やストーリーを司っています。そのストーリーによると、例えば亡くなった人は初七日に秦広王によって生前において悪業があったかどうか？またどのような悪業の持ち主かを審査される。そして次は三途の河に向かうのです。

三途の河とは一本の大河でその巾は四十由旬(約二八〇キロメートル)もあり、そこには渡る所が三ヶ所あるとされています。

そしてその場所の名前がそれぞれあり、一つは山水瀬(浅瀬の所)二つ目には江深淵(深い淵の所)三つ目が有橋渡(橋のある所)と申します。

なぜ三つの渡る所があるのか？それは生前に罪の軽・重及び業のありようで渡る所が決まっているからです。

三途の河の説によると、生前に善い事だけをした人は金や銀など七宝で飾られた有橋渡という橋を渡る事が出来る。そして罪の浅い人は膝くらいの水しかないゆるやかな流れの山水瀬という所を渡ることができる。悪行を重ねた極悪人の渡る所は江深淵という深い淵で、流れは矢の如く早く波は大山の如くでその波の中には毒蛇がいてその上、上流からは大きな岩石がゴロゴロ流れてくるという恐ろしい場所であるとされています。

この岸には葬頭河の婆といわれる奪衣婆と懸衣翁をいう二鬼がいて、奪衣婆は人の物を盗んだりする悪人の行為を戒めて両手の指を折ってしまう。懸衣翁は礼節の無い態度など憎んで、頭と足を一つにたたんでしまう。更に頭が牛の形をしている牛頭という鬼もいて鉄棒で男女の肩を挟んで追い回し、ことごとく衣領樹という大樹の下に集める。奪衣婆は着物を脱がせ、懸衣翁はその着物を枝にかけて生前に犯した罪や悪業の軽重をはっきりさせ、この世の地下五〇〇踰繕那(約三五〇〇キロ)の下にある閻魔王庁に送り込む、という説が人が亡くなった後の最初に当る恐ろしい行事ですが、これら恐ろしい行事に遭わない完全無欠な人はどれだけいるか？普通に生業を送った罪の軽い人でも、巾が二八〇キロもある河を膝まで水に浸り乍ら難行苦行をして渡らなければなりません。

次に百ヶ日に平等王(本地は観世音菩薩)は、人々に素晴らしい教示を与え、総ての人が平等に清らかになったかどうかを確かめて下さるのです。

一周忌には、都市王(本地は大勢至菩薩)が法華経や浄土経など、お経の功德を授けて下さる。

三回忌 五道転輪王(本地は阿弥陀如来)は衆生が次に生まれ変わる事などを決定してくれて、更に現世に残された人に対しても守護して下さるのです。

以上記述したように、中陰儀式のストーリーの中においてあらゆる病気も完全に治り、どんな大怪我でも元通りの身体になることができる。その上多くの菩薩や如来さまの教示を受け、人それぞれの資質に合わせた法力を身につけ、その法力によって残してきた家族に対し、悪者に襲われないよう、人生道を迷わないよう、病気にならないよう、怪我をしないようなど、さまざまな擁護が出来るようになるのです。残された家族に対しては、厳しい言い方ですが亡くなった人に対し返って来て！と何千回となえてもそれは絶対に無理な事です。それよりも私達は、今は淋しく悲しいけれど「現世の苦からはなれ安らかに穏やかに住して下さい。」とご冥福をお祈りすることです。

それこそが始まりと思ってお仏壇の前で自分を見つめ直し気を取り直して、強く現世のおつとめに励むことが亡くなった人や、自分自身に対する最大の供養になるのです。

お彼岸とは

布施

持戒

忍辱

禅定

精進

智慧

彼岸～彼の岸～つまり向こう岸ということです。

彼岸とは浄土の世界、あるいは大悟の世界、すなわち一切の煩惱・無明(まよい)を断じ尽くした円満無上の悟りの国という意味です。

これに対して此岸はこちらの岸ということです。

私達は日々人間苦や人生苦など、生死煩惱の世界におり、なりわいに追われている岸という訳であります。

一般にお彼岸は、春分の日と秋分の日を中心として、その前後三日にわたる一週間を彼岸会とし、人々は墓におまいりしたり、家族で彼岸だんごやおはぎを作って仏壇に供え、ご先祖さまの供養をするのがならわしになっています。

しかし本来は六波羅蜜と申しまして

- 一つには、布施、人に良い影響を与えるようなことや、心を潤すようなことを進んで行う。
- 二つには、持戒、と申しまして、悪い事はしないで善い事をする。自分をよく見て自分で裁くことなどを修行する。
- 三つには、忍辱、と申し、今あることに感謝し、不平不満は言わずに我慢すること。
- 四つには、禅定心、の静かさを保ち、自分を失わないようにすること。
- 五つには、精進、いつも目標をたて、努力を惜しまないで励むこと。
- 六つには、智慧、移りゆく世の中や時間、または心の変動などをありのまま見つめ、その真理を求めること。

以上のような仏道を修行して成就することを本来の意味とし、春と秋の二季に十七日間を定めて彼岸会としたものですが、それが春分の日・秋分の日と重なり、今の彼岸会の慣わしになったのではないかとわれています。

春彼岸の頃は、万物千草の芽生える時、冬の寒さに耐え自然のあらゆる生命が若々しく萌えあがる季節です。

小さな土筆が顔を出すなどを見る時、自然を讃え、生物を慈しむ思いが生まれるのも春ならではのことでありましょう。

秋の彼岸の頃は、自然の恵みを受け米や柿などでさまざまな実の収穫の時。

私達もこの大自然の法則や摂理の中に生かされている。

決して自分本位で生きているのではない事を知り感謝の念を深める事に気付くよう、春と秋のお彼岸は教示しているのです。

お盆とは

お盆という言葉は、あまりにも多く使われています。

例えばその代表的なものに、盆おどり・盆と正月が一緒に来たようだ!とか、盆・暮には〇〇〇とか、あるいはお盆までに必ず仕上げます・など多くは一つの節目にお盆という言葉が用いられているようです。

毎年のことながら、盆休みを利用して国民の大移動があります。難行苦行の帰省は、日本独自のものかも知れませんが、一族の絆を結ぶ大切な事柄とも思えます。お盆という言葉は、仏教に元をなしていることはご存じの通りです。しかし初盆を迎える人達にとって、何でお盆というものがあるのか?と思われるかも知れませんので、大略ながら方便を交えてご案内致します。

お盆の行事の典拠は孟羅盆経にあり、同経には釈迦の弟子で目蓮という人が仏道を修行したその報いとして①地獄道②餓鬼道③畜生道④修羅道⑤人界道⑥天界道という六道の世界が見える神通力を取得致しました。(六神通ともいう)

目蓮はこの六道眼を使って餓鬼道を見た時、こともあろうに自分の母親が餓鬼道に落ち、逆さに吊られ、しかも痩せ細って見るも哀れな状態にあるのを発見し、びっくり仰天してなんとか助けようと思い、ご飯を鉢に盛って食べさせようとしたところ、口に入る前に炭になってしまい、水を飲ませようとしたら水は炎と化し、どんなに工夫してもついに飲ませる事も、食べさせる事もできなかったのです。目蓮は深く悲しみ釈迦に母の救済を願いました。しかし釈迦は母の罰根が深くたとえ孝順な心が深くても、一人の力ではどうすることもできない。そこで目蓮に梅雨の明ける(夏安居という)時、修行も終わる七月十五日に七世の父母のために飯百味・五果ほかを供え、世の甘美を尽くして盆中にのせ、「十万大徳の衆僧を供養するべし」といわれ、そうすれば十万大徳の衆僧は先ず施主家のために七世の父母を救済する呪願をして、その後に供養を受けてくれるだろうと。と云われたのです。

目蓮は大変喜び七月十五日に孟羅盆会を催し、母のために供養したので母は餓鬼道から救われたのです。この話や行事が親孝行を願う人々によって代々伝わって今のお盆行事につながっているのです。

各宗派の法脈を通じ、仏道を成就した僧侶の方々に、亡くなった人が極楽浄土に行けるよう葬送の時に導いていただいているという確信をするも、七世の父母となるでしょうか?

素直に孟羅盆経にある目蓮尊者の話を受け、三界万霊のためにもお盆に供養することは、一家一族の信頼の絆を結ぶ大切な法要として、三世の中間にいる私達はこの行事の意味を大に受け、次世代に伝えることは大事な事柄です。尚、お盆の行事を都市部では七月十五日に行うところもありますが、先に記述したように、盆休みを利用して帰省する地方(ふるさと)では、農繁期の都合上、八月十五日(盆休みもこれに合わせている)ので一ヶ月遅れが多いようです。

施餓鬼会とはどのような意味か

お盆の前後に施餓鬼会を行うお寺が多いので、一般の人はお盆と施餓鬼会を同一のもと混同されやすいが、これは別の行事です。

では、何の為に?と思う人が大勢いますので、その要点である餓鬼について若干記述致します。

仏典に十界という教示があります。この意味は十種類の人間のありようと心の境界の事を指します。

十界の名称は最低部の境界から地獄界・餓鬼界・畜生界・修羅界・人界・天界・声聞界・縁覚界・菩薩界・仏界と計十界となります。その中の下から二番目に餓鬼界があり餓鬼道ともいう。この餓鬼道に落ちる人は食欲に支配され激しい欲望に身も心も捕られている境地にいて、金銭・財宝・食物等にいつも不足を感じて、なりふりかまわず只、食欲という汚れた生命の状態にいる生活者です。

こうした生業を終えた人が死んでも常に餓鬼の状態に落ち長期に苦しむ事になり、そのような人を餓鬼と称すると説かれています。

餓鬼の種類はあまりにも多く、その具体例は残酷でおそろもぞろして記述するに心がひるむ思いであります。

二～三申し述べますと、食火炭餓鬼という名の餓鬼は、常に墓場に行っては火で焼かれた屍を食べているが満足する事が出来ないので昼夜それを繰り返す。

のどが針のように細く食べる事も飲む事も出来ず、いつも空腹に苦しみ、手足はやせさらばえ、腹は大きくふくらみ無残な姿でさまよう餓鬼。更に昼間に五人、夜間に五人の子供を生んではその子を食べてしまう。それでもいつも飢えているので又昼夜に五人ずつ生んでは食べる事を繰り返すというなんともおぞましい餓鬼がいることを六波羅蜜経に説かれている。こうしたとんでもない餓鬼が何万鬼いるかわからない程、うようよといえるのです。それも百鬼百様の極悪で激しい苦を受けている。しかもその苦しみは長年月に及んでいる。

正法念処経によると餓鬼の世界は人間の一ヶ月が一昼夜で寿命は五百年とあります。その中に口から炎を出さざるを得ない焰口餓鬼がある時、お釈迦さまの弟子である阿難尊者の前にあらわれて「お前の寿命はあと三日だ!そして死んだら餓鬼になるのだ!もし助かりたければあらゆる餓鬼に一石ずつの食べ物を実施せ!」と言った。阿難尊者は驚くと同時にとてつもない数の多さに困りはてお釈迦さまにおすがり致しました。

お釈迦さまに、餓鬼を救う陀羅尼経をとなえて施しをすれば一切の餓鬼に法によって水や食物を与えることが出来ると教えられたので阿難尊者は早速それを実行して寿命を延ばし天寿をまっとうする事が出来たと伝えられています。施餓鬼会はこの話に基づいて行われるようになったのです。